

じょうこうじ

# 掟光寺だより

令和6年  
9月号

## 8月の行事案内

●22日(日) 13時半〜

「秋彼岸会」



## 彼岸会の起源

彼岸とは生き死にの世界にあつて苦悩する私たちが目指すべき理想の境地で、そのために春と秋の最も気候のよい季節に、一定期間修行する行事を彼岸会といひます。この期間に特にお墓詣りやお寺詣りをして先祖供養をねんごろに勤めますが、それは亡き人と、こころの交信をしあうこと、その交信を通じて、彼岸を静かに念ずることだといつていいでしょう。

彼岸会はインドや中国にはなく、日本ではじめられた行事です。そ

の起源には諸説があり、一説に、聖徳太子の時代に遡るといわれませんが、最初の記録としては、八〇六年、崇神天皇のために国分寺の僧に、春秋二季の七日間にわたり、金剛般若波羅蜜多經を転読させたのが彼岸の行事のはじめといわれます。

彼岸会は平安時代の半ばには恒例の行事になっていたようです。また彼岸を春分、秋分の日の前後七日にさだめたのは、次のことが起源とされます。



中国、唐代の僧で中国浄土教を大成した善導大師の『観無量寿経疏』の中に「念仏して西方浄土の往生を願うには、春(三月)・秋(九月)の、日が真西に没する時期がもっともふさわしい。なぜなら浄土は日が没する真西の方位にあり、その方位を念じて往生を願うことは浄土を觀想するにふさわしいからだ」という意味のことが説かれていま

す。つまり浄土教の説によれば、彼

岸は西方浄土であり、浄土を念ずる日である、ということになるでしょう。



また別の説明もあります。在家の人は普段は生業に忙しく、仏道を修行したり、善根功徳を積むことが容易ではない。そこで春秋二季の七日間、悪を止め、善事を実行する週間と定めたのが、彼岸の行事である、というものです。

なお戦後の一九四八年に制定された「国民の祝日に関する法律」によれば、春分の日は「自然をたえ、生物をいつくしむ日」であり、秋分の日は「祖先をうやまい、なくなつた人々をしのぶ日」とされています。

## 彼岸の修行

大乘仏教では、自分の悟りのみを目的とせず、すべての人間が平等に救われ成仏することが、究極の願いであるとされますが、そのために菩薩が実践すべき六つの道があります。

それを「六波羅蜜」といい、波羅蜜は梵語でパーラーミターといひ、訳して「彼岸」というのです。彼岸は悟りの境地を意味し、六波羅蜜は悟りの彼岸をめざすための、六つの大事な行いをいうわけ

です。その六つとは…  
第一は布施。施しをすることで、これには金品を施す財施、仏法を説く法施、恐れを取り除く無畏施の三つがあり、三施といひます。

第二は持戒。持つは「たもつ」とよみ、戒律をたもつことです。

第三は忍辱。様々な障害に堪え忍ぶことです。

第四は精進。仏道の成就を求め、たゆまず修行することです。

第五は禪定。身と心を静寂にたもち、精神を統一させることです。

第六は智恵。真理を見極める曇りない目を養うことです。

簡単に言えば、

- ① 布施・奉仕の心を忘れない
- ② 持戒・規律や人との約束を守る
- ③ 忍辱・花のような柔和な心をもつ
- ④ 精進・今日の務めに精を出し、励む
- ⑤ 禪定・平常心を忘れず、あわてない
- ⑥ 智恵・物事を正しく判断する智恵をもつ

【引用】寺報・はがき・行事案内文例事典。青山社。

